

「毎朝の合掌」

本山布教教化部出版室長 蔵重宏昭

合掌とは、もともと「インドでの敬礼法の一つで、相手に尊敬の念をあらわすこと（禅学大辞典）」とあります。仏教において合掌は、相手の仏の行いそのものや仏の行いを為す可能性に対し、尊敬の念を抱き手を合わせているのかな、と私自身思っています。

大祖堂でおこなわれる毎朝の朝課（あさのお勤め）ではその時間にあわせ一般の方がたがお参りされますが、ここ近年その数は以前よりも増しています。散歩の途中に、ジョギングの途中に、ラジオ体操の前に、とさまざまな理由があるようですが、朝課が始まれば皆大祖堂後方の椅子席に座り熱心に朝課の様子をご覧になっています。

朝課始めに大祖堂へ集まる際、方がたが坐ってらっしゃる前を横切る時、山内の僧侶は合掌をし会釈をしながら通り過ぎるのが通例となっております。私も朝早く集まってらっしゃる方がたに対し、「ご苦労様です」といった思いをこめながらそうしております。するとそのうち、あらかじめ合掌をして私たちを迎えてくれるお参りの方がたが現れました。

朝課終わり再び方がたの前を通り過ぎる際には、山内の僧侶は合掌し会釈し足早にそれぞれの寮舎にもどります。すると、やはり何人かの方がたは、合掌で戻る私たちを見送ってくださいます。

忙しい気持ちに囚われていますと、見送る方がたの合掌を思わず見落としそうになりますが、そうした方がたの丁寧な合掌のお陰で、^せ急いで余裕の無い自分に改めて気づかされます。

まず合掌という仏のおこないを示しながら、のちに方がたから合掌の大切さを教わる、というお互いがお互い学びあい気付きあう一体感が朝のひと時にはあるのです。

大祖堂の朝課に於いて、一見すれば大間で読経する僧侶のみが修行しているようですが、実は、後方椅子席で手を合わす一般の方がたもまた、共に仏の行いをし合い尊敬の念を抱きあう仲間であるように思うのです。

仏教における三つの宝、三宝の仏法僧の僧つまり僧伽（サンガ）は仏教を信奉する人の集まりを指しますが、出家者・在家者共に一体感を持つ集まりが大祖堂の朝のひと時にあります。僧伽（サンガ）がつくづく宝だと実感する毎朝です。